

江戸時代中期の天明2年(1782)、幕府のための作画、鑑定などの絵画業務を行なっていた御用絵師に、新たな家が加わりました。
「板谷家」です。

やまと絵を得意とした絵師の家系としては、その始まりが15世紀前半までさかのほる土佐派がよく知られていますが、江戸時代初期に土佐広通(住吉如慶)を初代として御用絵師住吉家が誕生し、これからさらに板谷家が分立しました。

東京国立博物館は平成22年(2010)3月、板谷家最後の当主である板谷廣起氏より、代々板谷家に伝來した絵画・歴史資料1万点あまりをご寄贈いただきました。一家に関わる膨大な絵画資料群は今まで世に公開されたことがなく、現在も分類整理を進めているところです。

今回の特集陳列ではこれまでの調査の中間報告として、当館が所蔵する板谷家と同時期の住吉家の本画、またこれに関連する板谷家伝来の絵画資料など28件をご紹介します。板谷家の総合的な研究はまだ始まったばかりですが、本陳列をご覧いただき、これからのお展開にご期待いただけましたら幸いです。

特集陳列 | Thematic Exhibition

「板谷家の絵画とその下絵」

Paintings of the Itaya Family
and their Drafts

2011年10月25日(火)－12月4日(日)
東京国立博物館 本館特別2室

Tuesday, October 25 – Sunday, December 4, 2011 Tokyo National Museum

In 1782 of the mid-Edo period, the Itaya family was newly appointed by the shogunate government to produce paintings for the shogunate as well as to make attributions.

They specialized in the *yamato-e* (traditional Japanese-style painting) genre, of which well known lineages include the Tosa family originating in the early 15th century, and the Sumiyoshi family which began in the early Edo period in the 17th century, founded by Tosa Hiromichi (later known as Sumiyoshi Jokei). The Itaya family branched from the Sumiyoshi and has continued until the present day.

Tokyo National Museum, in 2010, received a donation from Mr. Itaya Hirooki, the last family head, of over 10,000 items including paintings and historical materials which were handed down in the Itaya family. The vast collection of paintings and other materials, never before exhibited, is now undergoing categorization and registration.

As an interim report on the categorization process, which is also the beginning of a comprehensive study of the Itaya family, this thematic exhibition will display a total of 28 works from the museum collection such as paintings by the Itaya and Sumiyoshi painters, along with related items from the Itaya family materials.

TNM

住吉・板谷の肖像



1-3 板谷広当



1-1 住吉広守



1-2 住吉広行

1 住吉広守・住吉広行・板谷広当像

Portrait of Sumiyoshi Hiromori, Sumiyoshi Hiroyuki, and Itaya Hiromasa

広守像:住吉広行筆

広行・広当像:住吉広尚筆

3幅 絹本着色 各 92.6 × 42.0cm

江戸時代・18世紀 A-1086

清野長太郎氏寄贈

住吉家から板谷家が分立したときの住吉家当主広守を中幅として、左幅にその弟子であり板谷家初代の広当、右幅に広当の息子で住吉家を継承した広行を配置する。左右幅は広行の息子ひろなおによって追加されたもので、中幅のみに広行による広守略伝が着賛される。



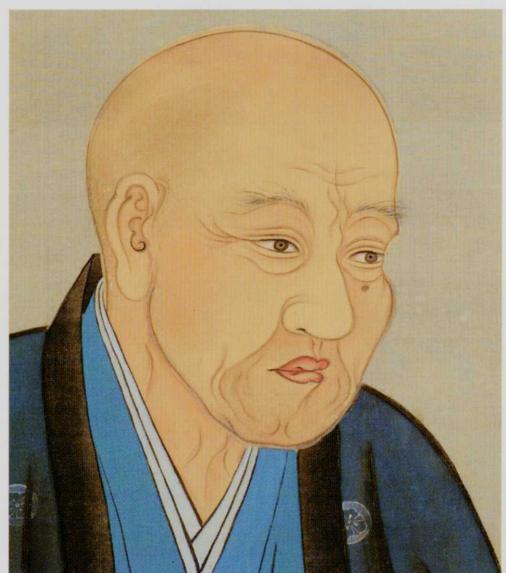
2 板谷広当像

Portrait of Itaya Hiromasa

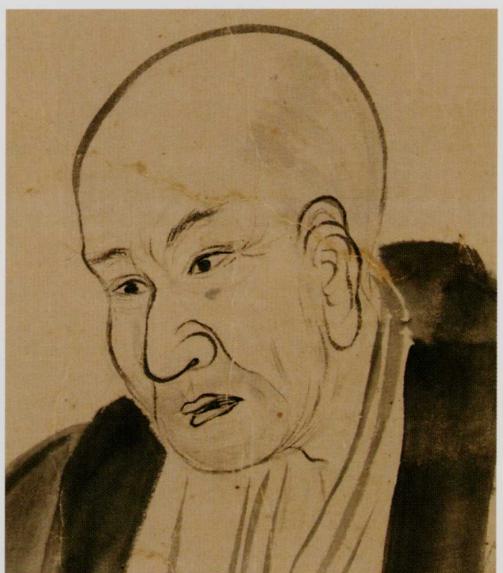
1幅 紙本墨画 138.5 × 59.5cm

江戸時代・18~19世紀

A-12372-10611



1-3 部分



2 部分

板谷家に伝來した初代広当の肖像。他に伝來する広当像とほぼ同じ像容であり、脇指をさし、刀は傍らに置いて、右手に絵筆が握られる。広当の法名「澄性院清江桂舟居士」が記され、明顯山祐天寺六世祐全による「南無阿弥陀仏」名号が貼り付けられている。

板谷広当の肖像画

広当の肖像については従来、「住吉広守・住吉広行・板谷広当像」(No.1)が黒川真頼『考古画譜』や、松原茂『画家・文人たちの肖像』(至文堂 1998)に紹介されたほかに、大きく取り上げられることはなかった。ところが今回、新たに2点の墨画広当像が板谷家伝来資料の中に発見され、展示の1幅(No.2)とその下絵とみられる簡易表装の1幅が知られることになった。

column

三幅対の着色広当像と板谷家伝来の墨画広当像は、身体の向きが逆ではあるが、老齢の法体で、面長の顔、大きな耳、切れ長の大きな目、高い鼻梁という共通点を持つ。これは両者が生前の広当を写生したものに基づいて描かれたためだろう。また、こうして見比べてみると、左目の下にある一見汚れと判じやすい黒いしみも、じつは像主が広当であることを示す大事な印であることがわかった。

板谷家と伝来資料

板谷家とは

板谷家は、江戸におけるやまと絵画風の継承流派である住吉派の支流として、天明2年(1782)から、江戸城の障壁画制作やオランダへの贈答屏風制作など、代々幕府の絵画制作に携わった絵師の家系である。

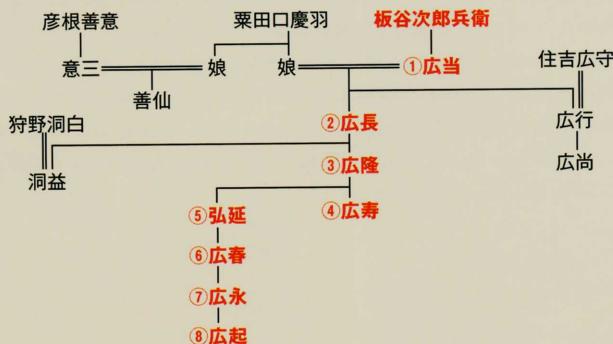
御用絵師住吉広守(1705~77)の弟子である慶舟広当(1730~97)は、安永2年(1773)に住吉家を継いだが、天明元年、長男広行に住吉家の家督を譲って退隠し、もとの板谷姓に復した。翌年あらた

column

めて幕府に召し出されたことにより、御用絵師としての板谷家が始まった。

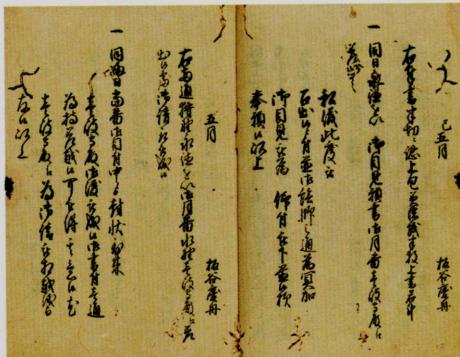
広当の後は、慶意広長、桂舟広隆、桂意広寿、桂舟弘延、桂意広春が御用絵師を務め、明治以後も桂舟広永、慶意広起がやまと絵画家として活動した。平成22年3月、古画の模写による粉本と下絵類が東京国立博物館に寄贈された。

【板谷家周辺略系図】



【歴代当主の号・名前・生没年・略歴】

- ①慶舟広当のち桂舟広当(1730~97) 1777年、板谷姓より住吉姓へ改姓。1781年、帰姓。1782年、新規召し出し。
- ②慶意広長のち桂意広長(1761~1814) 1792年、京畿にて古画模写に従事。
- ③桂舟広隆(1786~1831) 1828年、法眼に叙され治部卿を称す。
- ④桂意広寿(1817~36)
- ⑤桂舟弘延(1820~59) 1849年、江戸城本丸障壁画作成従事。1852年、西丸障壁画作成従事。
- ⑥桂意広春(1831~82) 1868年、駿府移住。1869年、東京還住、租税小佑任官。1870年、地理小佑任官。1871年、電信寮出仕。
- ⑦桂舟広永(1871~1949) 大正間に資料群を整理。
- ⑧慶意広起(廣起、1907~2008) 東京美術学校卒。日本画家。

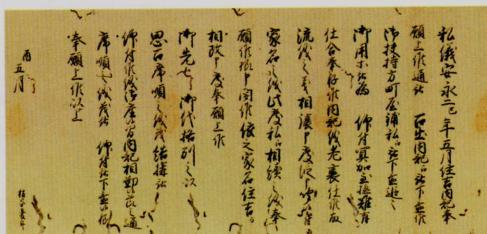


10 安永二年被召出候一件

Record of Order Received in the Year An'e 2

1冊 紙本墨書 24.0×17.6cm 江戸時代・安永2年(1773) A-12372-255

広当が幕府の絵師に召し出された際の関係文書をまとめたもの。



11 板谷慶舟名字住吉と家名相改度旨願書・付札共

Application by Itaya Keishū on the change of family name to Sumiyoshi: with Appendix

1通 紙本墨書 16.5×45.3cm 江戸時代・安永6年(1777) A-12372-127

流儀の継承に際して、住吉に家名を改めることを幕府へ願い出た文書。



12 住吉内記由緒書控

Copy of documentation for the title Sumiyoshi Naiki

1通 紙本墨書 17.9×221.7cm 江戸時代・文化7年(1810)10月5日 A-12372-132

幕府に提出した、住吉具慶以降広行まで住吉家歴代の履歴の控え。



13 慶意御目見願留メ

Concerning the applications for the visits to the shogun

1冊 紙本墨書 24.7×17.3cm 江戸時代・18世紀 A-12372-2745

広当が広長の将軍への御目見えを願い出て、許されるまでの文書を書き留めたもの。

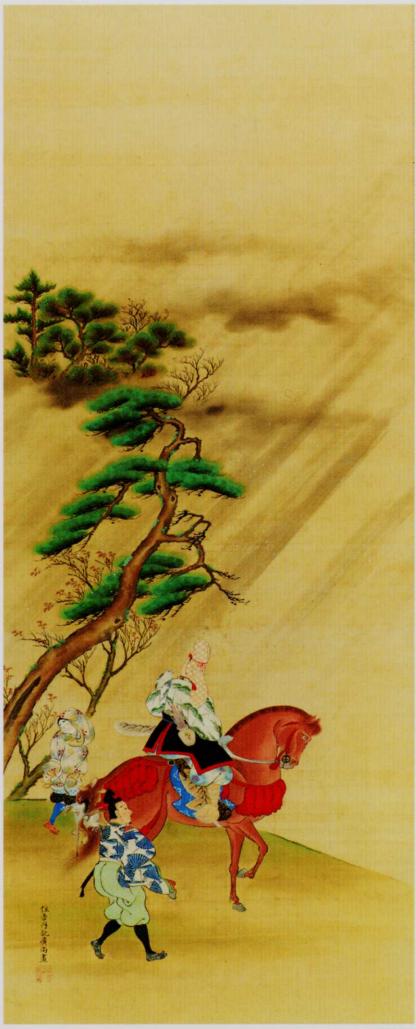
板谷家の伝来資料

column

板谷家の伝来資料は、江戸幕府の御用絵師を考えるうえで稀有な資料群であり、粉本や下絵などの絵画資料と同時代の古文書が、数度の整理を受けながら一緒に伝來した点に特徴がある。この中の古文書には、絵画史研究の基礎文献である大村西崖編『東洋美術大観』にその内容が引用されたものも含まれている。

初公開の古文書からは、初代広当が幕府に召し出されて以降の御用絵師板谷家の活動や、幕末維新时期に幕臣として奔走する様子が詳細にうかがえる。この資料群には、御用絵師としての板谷家成立以前の17世紀に作成された資料や、縁戚関係にあった御絵番坊主彦根家、やまと絵系絵師粟田口家の所蔵印が捺されたものも含まれる。他家から板谷家に入ったと考えられる資料の存在は、本資料群の形成過程と、当時の板谷家の動向を考えるうえで注目される。

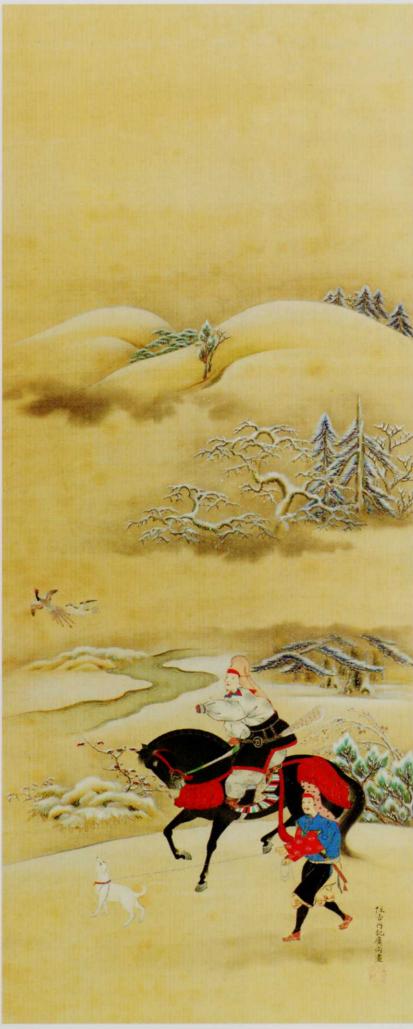
鷹狩図と下絵



15 鷹狩図

Hawking

住吉広尚筆 2幅 絹本着色 各106.1×42.9cm 江戸時代・19世紀 A-774



15-2

15-1

column

板谷家伝来資料の中には、鷹狩を描いた下絵が複数存在する。そこには、馬に乗り鷹を放つ人物や犬をついた従者など、ほぼ同じ図様が繰り返し用いられている。

住吉広尚「鷹狩図」(No.15)や、諏方尚栄「鷹狩図」(大英博物館所蔵)など、板谷家と関係のあるやまと絵作品において、下絵と類似した構図の本画も現存している。「鷹狩図」が武家に好まれた画題の一つであり、板谷家でも掛軸から大画面まで、図様を転用して繰り返し描いていたことが推測され、本画の発見が待たれる。

また、No.15の本紙裏に『金葉和歌集』『詞花和歌集』の歌が貼られていることから、「鷹狩図」が王朝和歌の絵画化を意識した画題であったろうことも指摘できる。

それぞれの本紙裏に貼られた鷹狩にまつわる和歌を彷彿とさせる、冬の鷹狩の様子が描かれる。顔の表現や装束、動物の毛など、丁寧に描かれた細密描写にも注目したい。

右幅「ぬれぬれも猶かりゆかむはしたか(鶴)のうはげの雪をうちらひつつ」
(『金葉和歌集』卷第4(冬)源道済)

左幅「あられふるかたの(交野)のみの(御野)の狩ころも(衣)ぬれぬ宿かす人しなければ」
(『詞花和歌集』卷第4(冬)藤原長能)



16 鷹狩春遊図下絵

Hawking in Spring (Draft)

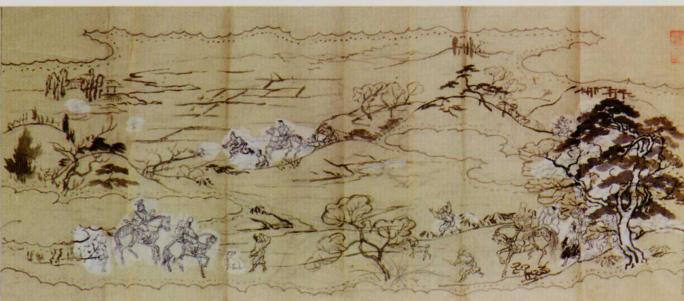
1枚 紙本着色 30.1×64.2cm 江戸時代・18～19世紀 A-12372-5637



17 鷹狩図下絵

Hawking (Draft)

1枚 紙本着色 30.1×64.2cm 江戸時代・18～19世紀 A-12372-5648



18 鷹狩春遊図下絵

Hawking in Spring (Draft)

1枚 紙本着色 31.7×66.1cm 江戸時代・18～19世紀 A-12372-8317



19 鷹狩図下絵

Hawking (Draft)

1枚 紙本着色 27.1×61.7cm 江戸時代・18～19世紀 A-12372-8320

住吉・板谷家の絵画



4



5

4 昆沙門天像
Bishamonten (Vaisravana)

板谷広当筆

1幅 絹本着色淡彩 45.2×19.5cm
江戸時代・天明2年(1782) A-250

落款から広当が53歳のときに描いたことがわかる昆沙門天像。水墨を基調に淡彩・金彩を施したもので、小画面ながら、帶や衣が風になびく姿を、肥瘦のある線でよく表している。鎌倉時代の絵仏師家の再興として誕生した住吉家の一端を担う、広当らしい一幅である。



6-3 柿本人麻呂

6-1 住吉明神

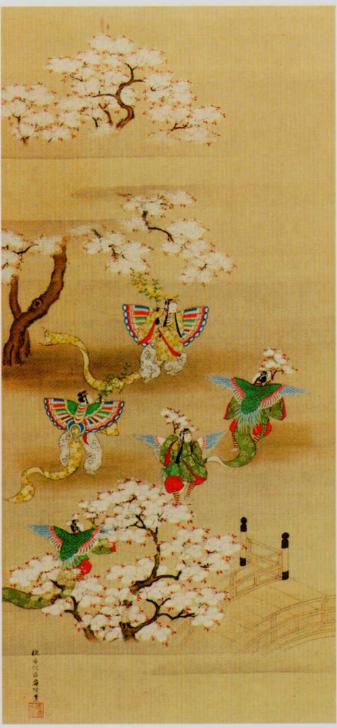
6-2 玉津島明神

6 和歌三神図
Three Japanese Immortals of Poetry

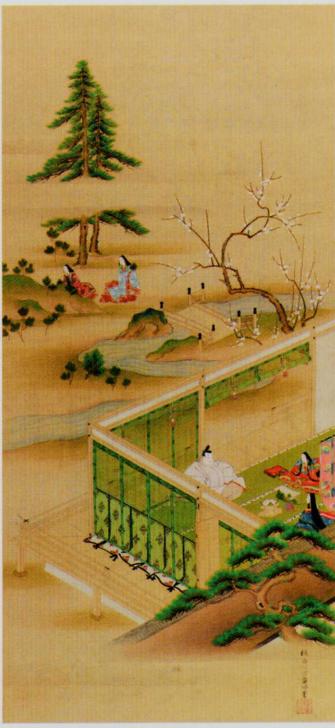
住吉広行筆

3幅 絹本着色 各100.0×38.0cm
江戸時代・18世紀 A-10443

住吉明神、玉津島明神、柿本人麻呂の和歌三神を、古来の図様に倣って描いた三幅対。住吉家は、鎌倉時代に摂津に住んだ絵仏師住吉慶忍(慶恩)の家を再興するため、土佐家から分立した。このことから摂津国一宮住吉大社と縁が深く、その神像もよく描いた。



23-2



23-1

23 源氏物語図 初音・胡蝶

Scenes from the Tale of Genji,
Hatsune and Kocho Chapters

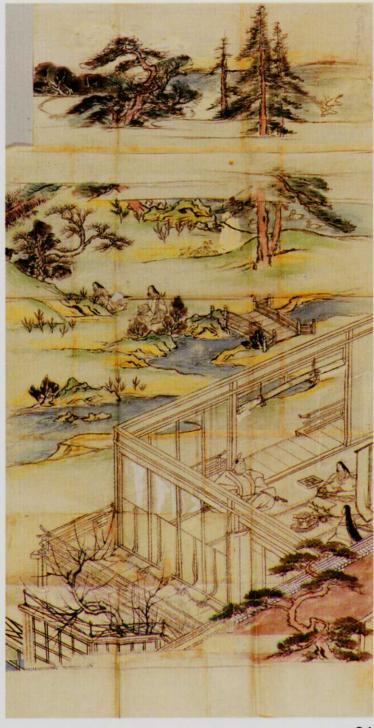
板谷広隆筆

2幅 絹本着色 各 99.0×45.4cm

江戸時代・19世紀

A-1054

光源氏が最も栄華を誇った時期を描く。向かって右幅は、紫の上と明石の姫君の住まう東の対屋の正月(初音)。部屋の中央に、姫の実母・明石の君からの贈物が置かれている。左幅はこれに続く春、船樂が催され、鳥と蝶の華やかな装束を纏った女童たちが描かれる〈胡蝶〉。



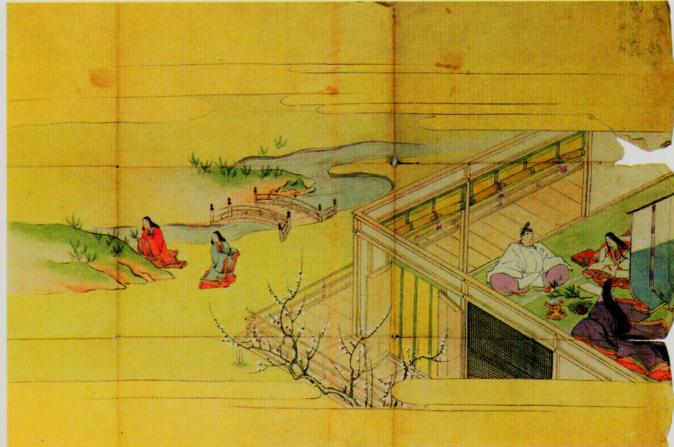
24

24 源氏物語図下絵 初音

Scenes from the Tale of Genji, Hatsune Chapter (Draft)

1枚 紙本着色 110.0×48.4cm

江戸時代・18～19世紀 A-12372-5667



25 源氏物語図下絵 初音

Scenes from the Tale of Genji, Hatsune Chapter (Draft)

1枚 紙本着色 42.7×60.0cm 江戸時代 18～19世紀 A-12372-7908

源氏絵

column

平安時代に成立した『源氏物語』は、江戸時代においても、公家や武家を問わず上流階級の教養の一つとして愛され続けていた。このうち主だった場面を絵画化した「源氏絵」は、やまと絵の中でとくに人気の画題の一つで、絵巻や画帖、屏風、掛幅などさまざまな形に描かれている。

江戸でやまと絵制作を担った住吉家や板谷家にとって、源氏絵は主要テーマの一つであり、いくつかの本画に加え、膨大な粉本が残されている。いずれも人物や建物、植物などのモチーフの形は近似するが、構図や配置を工夫し、より密度の高い絵画へと試行錯誤した跡がうかがえる。今回の展示ではとくに、本画と粉本の関係が明らかな場面を中心に紹介する。

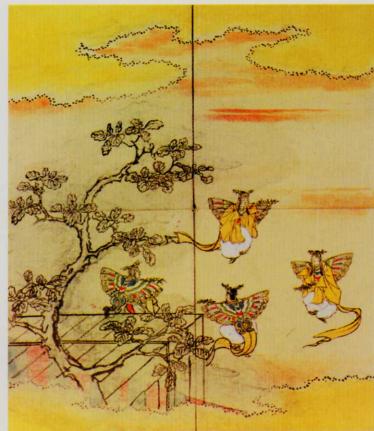


27 源氏物語図下絵 胡蝶

Scenes from the Tale of Genji, Kocho Chapter (Draft)

1枚 紙本着色 28.4×64.5cm

江戸時代・18～19世紀 A-12372-8442



26 源氏物語図下絵 胡蝶

Scenes from the Tale of Genji, Kocho Chapter (Draft)

1枚 紙本着色 38.9×32.9cm

江戸時代・18～19世紀 A-12372-2475

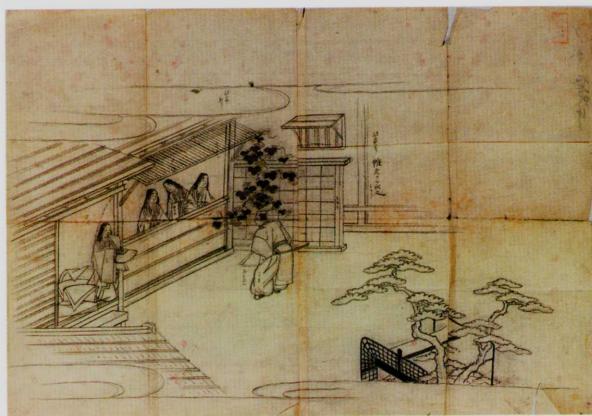
源氏絵と下絵



7 源氏物語図 夕顔

Scene from the Tale of Genji, Yugao Chapter
板谷広長筆 1幅 紙本着色 47.0×68.0cm
江戸時代・18世紀 A-603

年上の恋人・六条御息所のもとへ通っていた光源氏は、ある家先の夕顔に目をとめる。その家の女主人と恋に落ちる光源氏であったが、女性は御息所の嫉妬からくる物怪に取り殺されてしまう。扇に載せた夕顔を光源氏の使者に渡すこの場面は、源氏絵において繰り返し描かれた。



7

8 源氏物語図下絵 夕顔

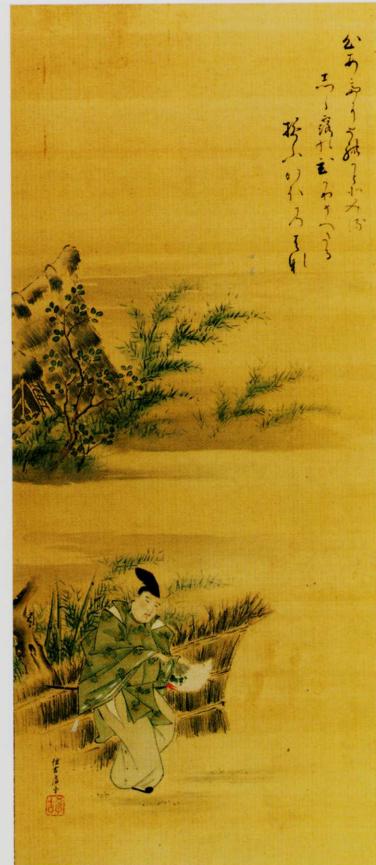
Scene from the Tale of Genji, Yugao Chapter (Draft)
2紙 紙本墨画 42.3×58.0cm
江戸時代・18～19世紀 A-12372-10101

3 源氏物語図 夕顔

Scene from the Tale of Genji, Yugao Chapter
住吉広守筆 1幅 絹本着色 86.3×38.1cm
江戸時代・18世紀 A-931

扇に載せられた夕顔を光源氏のもとへ運ぶ家来の惟光。源氏に宛てて女主人が扇に詠んだ和歌が上部に記されている。

「心あてに それかとぞみる しら露の
ひかりそへたる ゆふかほのはな」



3



20-2

20-1

20 源氏物語図 紅葉賀・乙女

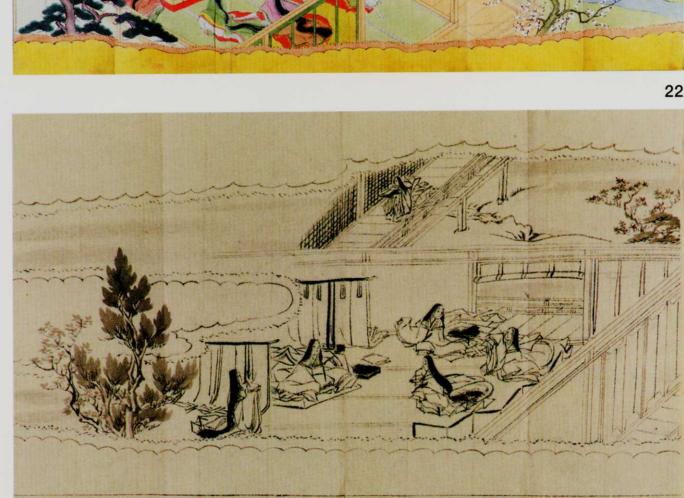
Scene from the Tale of Genji, Momiji-no-ga and Otome Chapters

紅葉賀:住吉広尚筆、乙女:板谷広隆筆 2幅 絹本着色
各94.8×31.8cm 江戸時代・19世紀 A-852

向かって右幅は、雛遊びに熱中する紫の上と光源氏を描く(紅葉賀)。左幅は、源氏が造営した六条院で、秋の対屋に住む秋好中宮が、庭先の色とりどりの紅葉を女童に持たせ、春の対屋に住む紫の上に贈る場面を描く(乙女)。住吉家と板谷家の共作として注目される。

22 源氏物語図下絵 紅葉賀

Scene from the Tale of Genji, Momiji-no-ga Chapter (Draft)
1枚 紙本着色 31.0×65.0cm
江戸時代・18～19世紀 A-12372-5653



21

21 源氏物語図下絵 乙女

Scene from the Tale of Genji, Otome Chapter (Draft)
1枚 紙本墨画 24.0×38.5cm
江戸時代・18～19世紀 A-12372-8448

写生画と印章



9-2



9-1

9 草花図

Flowering Plants

板谷弘延筆

2幅 絹本着色 各108.0×44.6cm 江戸時代・19世紀 A-88

画面を円窓と团扇形に区切って青い外縁をかけ、それぞれに春と秋の七つの草花を繊細に描く。春は菜の花、たんぽぽ、福寿草など、秋は水仙、薄などが、丹念な観察に基づいて写生されている。

14 図案下絵切抜帳

Scrapbook of draft paintings

1冊 紙本着色 29.7×27.8cm A-12372-9126

実際の写生のほかに、先行図を写して集めた図を切り抜き種類別に貼り込んだ図案帳。絵画制作の際に参考としたもので、板谷家成立以前に描かれた図も多く含まれている。ヤマアラシの図は、留書から明和9年(1772)に薩摩藩より献上されたものを住吉広行が18歳の時に写生したものとわかる。怒ったときのようすや歯の形などの特徴も描き添えられている。

28 板谷家代々所用印ならびに印簾筒

Seals and Chest used by the Itaya Family

江戸時代・18～19世紀 A-12372-9842, A-12372-9843

板谷家に伝來した広当以降の歴代の印章63顆(81面)と、それらを収めた二段引き出し式の印簾筒。中には、粉本類に捺されている「板谷絵所」(朱文長方印)や、「勿来関図」(No.5)に捺されている「和画一流」(朱文円印)の印も含まれている。



14部分



28



28部分

板谷家の絵画とその下絵

平成23年10月25日発行

執筆: 田沢裕賀、瀬谷愛、金井裕子
(以上、東京国立博物館)
大橋美織(静嘉堂文庫美術館)
田中潤(学習院大学)

翻訳: 東京国立博物館国際交流室

撮影: 藤瀬雄輔(東京国立博物館)

編集・発行: 東京国立博物館

デザイン・制作: D_CODE

©2011 東京国立博物館

*本展は平成23年度科学研究費補助金基盤研究(A)「板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究」の研究成果である。

*本目録に掲載の作品は東京国立博物館所蔵である。作品データの末尾に当館の所蔵番号を記した。

*所蔵番号A-12372はすべて板谷廣起氏寄贈。